

逢瀬

森野 水琴

男は単身赴任から地元へ転勤となり、以前のとおり家族と同居している。
女は現地妻よろしく東京での男との再会を願い、青みの薄紫の夢を見ている。

男から次の水曜日に東京へ出張に来るといふ連絡が入った。
女の心に春が来た。

一夜限りの逢瀬に雨は無用。

当日の夕食は女の家で再会を喜ぶ宴となった。

夕食を終え、部屋の明かりを薄暗くして、ふたりは素肌に背徳の黒をまとう。
果てしない耽美な海に、ふたりで溺れていく。

何度も何度も互いを愛でながら、夜は更けていく。

あと一回とせがむ女

愛でて応える男

眠らぬ夜が明けていく